



「先生。地震は大丈夫ですか？」5年半前の厚真東部地震が起きて約6時間たち、苦小牧に向かう私達を乗せた車がノンストップで36号線を下っているさなかに、日頃より親しくお付き合い戴いているK大学のT先生からお電話を戴いた。能登半島地震が起きてまもない元旦の午後5時頃、5年前の電話と同じ内容の電話を私がT先生にしているのであった。

地震学者で初代気象庁長官を務められた和達清夫（わだちきよお）氏は著書の中で地震が起きてい

地球規模で考えると、どの地域でも自然災害

れることなく、自然災害や戦争により人口制限がなされているのかもしれない。
右記のような戦禍の中で新しい小さな命が生まれている。言うまでもなく、生まれた子供達に罪があるはずがない。私たちはできる限り、罪のない小さな命を支えるユニセフの活動に積極的に参加したいと思う一方で、殺戮がやまない環境下で罪のない子供達の生存を脅かす因子をできうる限り、排除する知恵が必要とされている。

自然災害・戦争と人口制限論

情報広報部長

橋本

洋一

に伴う恐ろしい現象として、火事と津波を両大関に据えられているが、今回の能登半島地震にも当てはまると思われる。

元旦早々から、地震が起きたこと事態現在の日本の、いや世界の置かれた自然災害の状況を象徴しているように感じられて仕方がない。2023年8月にハワイ・マウイ島で起きた森林火災はまだ記憶に新しいが、今年になって、地球の裏側のチリで起きた森林火災でも多くの犠牲者がでている。

古典的名著である『人口論』の著者である古典的経済学者トマス・

ロバート・マルサスは、①人類の生存に食糧が必要である②異性間の情欲が必ず存在する

という2つの基本的人口原理を大前提において人口制限論を展開している。マルサスは人口増加が生活資源を生産する土地の能力よりも不等に大きく、人口制限をしなければ、生活資源が確実に不足すると指摘している。自然界に生きる多くの生物は弱肉強食の世界に身を置いているが、我々人類もその例外に漏

たりにして、復讐の連鎖に希望という文字がかき消されそうになる。

地球上の人口が80億に達した現在、頻発する気候変動に人口増加が深く関わっていることが示唆されている。

人類はかけがえないこの地球上で、地球

の環境保全に責任があるはずだ。しかし、自分たちのご都合主義で多くの絶滅危惧種が生まれ

地球から消えさつていく。生活資源が不足する飢餓状態の中でも、マザーテレサが言われるように愛が生まれてほしいと願うが、愛は生まれない。簡単に戦争を起こし、弱い子供達や女性達を含めた多くの人々を殺戮しているからだ。

地震発生から丸2か月を迎えた3月1日、遅まきながら、当院のスタッフが長期化しつ

つある能登半島地震の現地に向けて北海道JRA T (DOCAT)・北海道災害リハビリテーション推進協議会)の一員として、出向くこととなった。精神的にも身体的にも傷ついた人々に、温かい寄り添う気持ちを届けてほしいところから切に願っている。

240名を超える犠牲者の方々ならびにそのご遺族の方々に心より哀悼の意を表したいと思います。